

もうひとつの風景を旅する

まるで夢のような風景だ——東山魁夷が描いた御射鹿池（茅野市）を目前にしたとき、思わずそう思ったことがある。それだけでない。希望湖、諏訪湖、八島湿原、上高地。信州を歩いていると、浮世離れた「夢のような風景」と出くわすことは珍しくない。

御射鹿池を描いた東山の《緑響く》(1982)は、一見すると独創的なアイデアによって描かれた作品に見える。「なぜ、東山はこんなビジョンを思いついたのだろうか？」——御射鹿池を訪れる前までは、ぼくもそんな風に思っていた。しかし実際に現地を訪れてみてわかったことは、東山の作品よりも先に現実の風景があり、画家の想像力はそれに引っ張られるかたちで（いわば影を追いかけるようにして）生み出されたということだ。

そのような視点で長野県立美術館の作品を見つめ直すと、じつに多くの作品が「風景の影」として生み出されてきたことがわかる。「異形の風景」とでもいうべき特異な作風で知られる河野通勢は、長野市内の裾花川沿いを多く描いてきた。これも実際に彼が描いた川沿いを歩いてみると、まるで爬虫類のような形をした崖、曲がりくねった柳の木など、河野の画風そのままの風景が目前に現れて驚いたことがある。

それだけではない。コンセプチュアリズムの作家として世界的に知られる松澤宥は、その作品の多くが「言葉」によるものであるため、難解なものと思われることが多い。しかしよく見てみると、それらの多くが松澤の暮らした諏訪周辺の土地に触発されたものであることがわかる。それは「風景表現としてのコンセプチュアル・アート」とでもいうことができるのだ。

信州の風景がアーティストに想像力を与えてきたということ——こうした発想は、従来かけ離れたものとされがちな「風景表現とコンセプチュアル・アート」という二者を結びつけるアイデアをもたらしてくれた。

そして最後に、信州と風景表現をめぐる一連の旅に現代的なリアリティをもたらす作品を紹介したい。幕末生まれの画家、赤羽雪邦は、東京美術学校の1期生として、横山大観、下村観山、西郷孤月らと机を並べた仲だった。したがって、キャリア初期においては「中央画壇での成功」に最も近い位置にいた人物だったが、卒業後に単身アメリカに渡ったことで、日本からは「忘れられた画家」となってしまう。そんな赤羽が描いた《米国風景》(1914)は、伝統的な山水画の中にネイティブ・アメリカンの姿が描かれた奇妙な作品だ。

まるでハドソン・リバー派（アメリカの風景画の潮流）と山水画が融合したかのようなこの作品を初めて見たとき、強い衝撃を覚えることになった。なぜなら、ぼくはかねてより19世紀に隆盛したハドソン・リバー派の絵画はMicrosoftやAppleなどのアートワークに影響を与えたと考えており、現代人が普段目にする「風景画」であるパソコンのデスクトップアート（その一部は近年「ドリームスケープ」と呼ばれている）に姿を変えて、現代にも息づいていると考えていたからだ。さらに、こうした「ドリームスケープ」と美術史上で最も近い位置にいるのが、言葉によって「目に見えない風景」を表現しようとしてきたコンセプチュアリズムの表現、たとえば松澤の作品であると考えてもいた。

ハドソン・リバー派、コンセプチュアリズム、ドリームスケープ——信州の風景を経由することで、これまでバラバラに存在していた三者が突如として結びつくような感覚を覚えた。もちろん、これはアカデミックな調査に裏づけられた考えではない。アーティストのたわ言と思われても仕方ないのかもしれない。

しかし、先ほど東山や松澤らが「現実の風景に引っ張られるように」作品をつくってきたと述べたように、現代を生きるアーティストであるぼくも「現実の作品に引っ張られるように」展覧会を企画してみたいと思ったのだ。もしかするとその先には、かつてのアーティストが図らずもたどり着いた「もうひとつの風景」が広がっているのかもしれないのだから。

NAM コレクション 2024 第III期

もうひとつの風景

2024年10月10日（木）～12月17日（火）

ゲストキュレーター：原田裕規（公開制作 vol.4 招へい作家）

原田 裕規（はらだ・ゆうき）／アーティスト

1989年山口県生まれ、2016年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。

主な個展に「やっぱり世の中で一ばんえらいのが人間のようでございます」（日本ハワイ移民資料館、2023年）、

「アペルト 14 原田裕規 Waiting for」（金沢 21 世紀美術館、2021年）、単著に『評伝クリスチャン・ラッセン』

（中央公論新社、2023年）など。